戦争が始まり、昭和十六年には花火の製造は全面禁止になります。一部の業者は軍の下請けで発煙筒などの製作に従事しました。終戦後の昭和二十三年に花火の製造が再び始まり、各地で花火大会も開かれるようになります。同三十年以降マグネシウムが広く一般にも普及し、さらに同四十五年以降はチタニウム合金の導入で一層きらびやかな花火が生み出されるようになっていきます。

大きく開いて美しいと世界で高い評価を得ている日本式の打ち上げ花火は、海外へも輸出されています。国内生産高が増え続ける半面、労働力の不足、円高などの影響で、近年は輸出量が徐々に減少。中国や台湾をはじめ東南アジア諸国で製造されたものが欧米諸国へ輸出されるようになってきました。小さな玉や簡単にできる玉は逆に日本へ輸入され、国際分業の時代へと推移してきています。

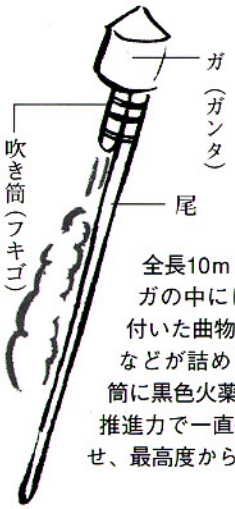
志太の花火

●静岡は「焔硝」の産地

静岡県ではいつごろから花火が作られ、一般の人々に楽しまれていたのでしょうか。『駿国雑志』や『駿河志料』によると、慶長年間（一五九六～一六一四）に家康が安倍郡井川村（現・静岡市）の山中に火薬庫を置いたとあり、また黒色火薬の原料となる焔硝[※7]が安倍郡の産物として作られていたことも記されています。これにより、火薬の製造方法はこの時代に既に静岡に浸透していたことがうかがえます。

さらに古くは、戦国時代の軍事産業としての鉄砲火薬作りに歴史をさかのぼることができます。本川根町長島に伝わる「ツメコ」といわれる花火遊びには、黒色火薬を筒に入れて押し固めるといった鉄砲火薬作りに近い技法が使われ、清水市草薙近辺でもこれに近い工法が伝えられていました。また、戦前の花火作りでは、火薬の合わせができるとその質を見極めるための「タメシ」という性能試験が必ず行われていました。花火の火薬作りと鉄砲火薬作りが共通の技法に根ざしていたことが、以上のことからうかがえます。静岡の花火作りの素地は、鉄砲火薬作りの伝統の上に重なって築かれていったといえるでしょう。

こうした火薬の製造技術に、遊びとしての花火、また信仰としての花火など、さまざまな要素が加わり、花火作りは発展していきます。江戸時代の後半から明治・大正・昭和の初めまで、祭りの余興として若者たちによって盛んに手作り花火が打ち上げられていました。



龍勢

全長10m
ガの中にはパラシュートが付いた曲物（連星・龍・花篭）などが詰められている。吹き筒に黒色火薬を詰め、その燃焼推進力で一直線に龍勢を上昇させ、最高度から曲物を打ち出す。

●龍勢の伝説

志太地区には、手作り花火の伝統を今に伝える龍勢（流星）があります。この伝承